

# 【下関市総合教育会議議事録】

## 令和7年度第1回下関市総合教育会議

開催日時	令和7年5月22日（木） 13:30～14:30
開催場所	教育センター 3階 中研修室
出席委員の氏名	前田 晋太郎（市長） 磯部 芳規（教育長） 佐々木 猛（教育長職務代理者） 吉村 邦彦（教育委員） 川畑 誠治（教育委員） 畚野 美香子（教育委員）
欠席委員の氏名	欠席なし
委員、関係者及び傍聴人を除くほか議場に出席した者の氏名	総合政策部長 佐藤 武 教育部長 門田 重雄 教育部理事（教育部次長）藤井 長武 教育部理事（教育部次長）藤井 信幸 教育部次長 岡本 正康 教育調整監 藤田 信夫 教育部次長（教育政策課長）加藤 修 教育部次長（学校教育課長）大坪 勇一 教育部次長（歴史博物館長）古城 春樹 教育部参事（下関商業高等学事務長）大賀 幸一 教育指導監（生徒指導推進室長）林 哲史 教育研修課長 安藤 健治 学校支援課長 弘中 雅也 学校保健給食課長 森本 匡将 生涯学習課長 有田 俊一 中央図書館長 崎野 美也子 文化財保護課長補佐 藤井 一彦 美術館長補佐 渡邊 優子 教育政策課長補佐 吉岡 孝二 教育政策課主任 吉富 守夫
傍聴人の数	0人

次第（目次）

【開会の宣告】 .....	P 3
【市長挨拶】 .....	P 3
【教育長挨拶】 .....	P 4
【協議・調整事項】	
「下関市教育大綱の策定について」 .....	P 4
【その他】 .....	P 1 2
【閉会の宣告】 .....	P 1 3

## 【開会の宣告】

門田重雄（教育部長）

ただいまから、令和7年度第1回下関市総合教育会議を開催いたします。

初めに、総合教育会議の主催者であります、前田市長に開会の挨拶をお願いいたします。

## 【市長挨拶】

前田晋太郎（市長）

今日はお忙しい中、総合教育会議に教育委員の皆様お集まりをいただきましてありがとうございます。私も3期目の就任ということで選挙以降の初めての総合教育会議になります。

これまで、私も市政を市長としてお預かりして、様々な施策、取組みを重ねてきました。市長の仕事はもちろん教育だけではなく、道路のことであったり、観光のことであったり、福祉のことであったり様々ある中で、下関に対して何を一番、これまで前田晋太郎は取り組んできましたかと、当然選挙のときは聞かれるのですけれども、そのときは迷わず私は「教育と子育て」を一番やってきたと話します。その次は農業だとか、観光だとか港だとかそういうことを、今まで話をしてきました。

振り返って、総合教育会議という形も、国の方針でもあったのですがこの形になって、これまで交代はありながら教育委員の皆様と議論し、皆さんの思いを聞かせていただいて、皆さんと一緒にこの体制を築いてきて、1つひとつ事業に取り組んできました。

お金が本当に前半戦はなくて苦しい時代もありましたけれども、転機として、普通教室に一気にエアコンをつけたのを半年間でやり切ったということは、我々にとって大きな自信になったと思います。これからまだまだトイレとか庁舎の老朽化を対応する取組みであります。あとは、支援員や学校司書とかを増していくことをやってきましたけどまだまだやるべきことはあります。生まれている子供たちの数は決まっているのでこれから減っていくことは当然想定をされるのですが、だからといって緩めることは全くすることはなく、これからも力を入れて当然やっていきます。子供たちにやっぱりこの町でしっかりと愛情を持って育ててもらったという、記憶とかその思いをしっかりと持ってもらう、その先にあるこの未来に向けて、下関に振り返ってもらうことが、私は非常に大事なことだろうと思っておりますので、引き続きよろしくをお願いいたします。

今日は、教育大綱の策定についてということが大きなメインテーマになります。1月の総合教育会議で皆さんと協議をして、新しい教育理念となります、「CHANCE（可能性） CHALLENGE（挑戦） CREATE（創造）～ふるさと下関に誇りと愛情 未来を拓く 一人ひとりの学び～」を創ることができました。これはご記憶にあると思います。これには私の子供たちにふるさと下関を意識して欲しいという思いもしっかりとこれ反映されているものであります。

新しい総合計画が完成をいたしまして春からスタートしております。そして、6月の議会が6月頭から始まりますけど、この6月の議会というのは、職員の皆さんはわかっていると思いますが、現在、令和7年度の春の予算というのは、選挙があったため骨格予算として、誰が市長になっても、最低限これは市としてやらなくてはならないという予算で通過されています。その上で、今、我々は成り立っているという状況なのですが、選挙が終わって新市長のもとで、新しい政策、市長がやりたいと思うものを議論していくのが6月議会になります。この弾込めの準備がもう大詰めに入っているのですけれども、かつてないぐらいのボリュームと、市民の皆さんの声が反映された素晴らしいものになっております。

だから今、言ってしまうと、私が公約にしていた学校給食の完全無償とか、そういったものをしっかり入れています。ボリュームも当然にあることながら、子供たちに関係があるものとすれば、北九州の中学生の殺傷事件という痛ましい事件も我々は経験をして、これは他人事ではない隣の市だからどうこうってことじゃなくて、我々もしっかりと、そういったことがないように取り組んでいくために私も防犯カメラっていうのは必要だろうと思います。下関市は、実はこれまで市として防犯カメラを設置した経験は1機もないんです。山口県下でもこの取り組みでは最低でありました。これは、防犯カメラをつけると監視されているのではないかという市民の不安の声につながることもあって、前のめりでやらなかったんですけど、今回それをやっていこうと、

それを登下校の通学路をはじめとする一部に充てていこうということです。そういったことでも大きな変化がこれから町に起きます。

ですので、教育委員の皆様は教育に対する思いを持っていらっしゃるの当然ですが、より一層、注目注視意識を高めてもらって、大きな柱を背負っていただいている皆さんであると自覚をしていただいて、力を貸していただきたいと思っております。

少し長くなりましたけれども、冒頭の挨拶をさせていただいて、この後、教育大綱のことについてはしっかりと、忌憚のないにご意見をいただいて、皆さんと確実に1つひとつ進めていきたいなというふうに思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

門田重雄（教育部長）

前田市長、ありがとうございます。続きまして、教育委員会を代表して、磯部教育長が挨拶を申し上げます。

#### 【教育長挨拶】

磯部芳規（教育長）

教育委員会を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

私ですが、教育長に就任し、わくわくする学校、教育づくりについて、市長から全面的な支援を受けて、この2年間懸命に取り組んでまいりました。

学校の差はありますが、多くの学校で地域の方々が学校運営に楽しく参画され、笑顔や笑い声が学校内、職員室、教室に出ているといううれしい声も届いてくるようになってきました。その形が不登校児童生徒数の減少につながるなど、良い効果が少しずつ現れてきたようにも感じます。

そこで、今後、教育委員会では、わくわく、どきどきする教育に下関市の歴史・伝統・文化の承継に資する教育、国際都市を体現する教育、地域や企業、そして下関市立大学と連携したキャリア教育などを取り組み、幼児から大人まで魅力的な学びがある教育の街下関を発信していきたいと考えています。

そして、ふるさと下関に誇りと愛情を醸成し、未来を拓く若者の市外流出に歯止めをかけ、一度市外に出てもまた下関に戻ってきたくなる教育を展開していきます。

私の教育の信念である、「困難なことが目の前に現れても、それと対峙し英知を持って乗り越えて欲しい、生き抜いて欲しい」という願いを、教育理念の「CHANCE（可能性） CHALLENGE（挑戦） CREATE（創造）」に込め、下関市のだれもが口ずさめるように、どんな時でも口にだせるようにしたいと考えています。

総合教育会議において、前田市長、教育委員の皆様と意見交換を行い、これからの下関の教育を前進させる大変有意義なものになると期待しております。本日はよろしくお願いいたします。

門田重雄（教育部長）

ありがとうございます。それでは協議・調整事項に入らせていただきます。

これより、議事の進行は前田市長にお願いいたします。

#### 【協議・調整事項】

下関市教育大綱の策定について

前田晋太郎（市長）

それでは、協議・調整事項「下関市教育大綱の策定について」に入ります。

教育大綱については、昨年7月の総合教育会議において、「教育振興基本計画をもって教育大綱とする。」方針について、皆さんと協議し確認をさせていただきました。

このたび、下関市教育振興基本計画が策定されたとのことで、説明を受けた後、この会議において教育大綱としていきたいと思っております。

では、事務局より説明をお願いいたします。加藤部次長お願いします。

加藤修（教育部次長（教育政策課長））

下関市教育振興基本計画について説明いたします。お手元の下関市教育大綱（案）をお願いします。表紙には、案として、下関市教育大綱と下関市教育振興基本計画を併記しております。

2ページをお願いします。2の計画の位置付けであります。本計画は、教育基本法第17条第2項の規定に基づき、本市における教育振興のための施策に関する基本的な計画として位置づけるものであり、また、本市における総合的かつ計画的な行政の運営を図るために定められた第3次下関市総合計画を踏まえて策定するものです。3の計画期間であります。第3次下関市総合計画の計画期間は令和7年度から令和16年度までの10年間となっております。第4期となる教育振興基本計画は、そのうち令和7年度から令和11年度までの5年間としております。

ここで、教育振興基本計画の策定過程について簡単に説明いたします。

本計画の策定に当たりましては、今年1月の教育委員会定例会のほか、総合教育会議において、2回協議が行われたところでございます。1回目の総合教育会議は令和6年7月で、教育振興基本計画をもって教育大綱とすることとされました。2回目は令和7年1月で、主に基本理念について協議が行われました。ここでのご意見を受けまして、基本理念の副題を修正するとともに基本理念の解説文などを修正しております。また、本計画の策定に当たりましては、令和7年3月10日から4月9日まで、パブリックコメントを実施しました。意見の応募者は10名で、意見の数としては20件の提出がありました。このパブリックコメントのご意見を踏まえて、1箇所修正を行っております。こうした修正を重ねた上で、昨日の教育委員会定例会において、下関市教育振興基本計画として定められたものでございます。

それでは、本計画の内容について、説明いたします。

3ページをお願いします。1 基本理念（教育理念）でございます。基本理念は「CHANCE（可能性） CHALLENGE（挑戦） CREATE（創造）」、副題として「ふるさと下関に誇りと愛情 未来を拓く 一人ひとりの学び」でございます。副題の「ふるさと下関に誇りと愛情」については、令和7年1月の総合教育会議でのご意見を受けて追加したものであります。

4ページをお願いします。基本理念の解説文を掲載しております。解説文では、冒頭「下関教育の基盤にあるのは『ふるさと下関』への誇りと愛情を育む教育の充実」とし、「自分の住むまち、育ったまちの自然や人々、伝統・文化のすばらしさを感じるとともに、課題を理解することが、自ら未来を拓いていこうとするエネルギーになる」と、本市教育の基盤について述べております。その上で、下から二つ目の段落になりますが、新たに下関教育では、「わくわく」が止まらない「学び」の充実・発展を目指して、成長のサイクルを「3つのC」として基本理念に掲げ、未来を拓く人づくりを進めていきます。「CHANCE」 自分の可能性に気づき、前に向かう意欲を育む学び「CHALLENGE」 失敗を恐れず自分の可能性へ挑戦し続ける意欲を育む学び「CREATE」 挑戦し続けることで「わくわく」を創造し、新たな可能性を見つける意欲につながる学び、と基本理念の3つのCについて解説しております。

5ページをお願いします。2 基本目標でございます。基本理念を具現化するため、3つの基本目標を設定しております。基本目標Ⅰは「教育の振興を図ります」です。基本目標には、それぞれ「課題」と「基本目標の考え方」を示しております。このうち、基本目標Ⅰの考え方については、基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、様々な問題に積極的に対応し解決する「確かな学力」、自らを律しつつ他人とともに協調し、命を大切にす心や他人を思いやる心、感動する心等の「豊かな心」、たくましく生きるための「健やかな体」を3つの柱として「生き抜く力」を育成するとともに、すべての子供たちが、学びにつながるよう子供たちの状況に応じて新たな学びの場を整えるなどきめ細かな教育を推進します。また、子供たちに質の高い教育を提供するため、研修体制の充実や校種間連携の促進等により学校の組織力を高め、教職員一人ひとりの適正・能力・課題に応じて計画的・継続的に指導力を向上させるとともに、ICT教育環境の整備、トイレの洋式化、バリアフリー化、空調設備の設置、老朽化した学校施設の改善等、地域の実状に応じて、安全な教育環境の整備を推進します。としております。この基本目標の達成のため、確かな学力の育成、豊かな心の育成、健やかな体の育成など、8つの基本方針を定めています。

7ページをお願いします。基本目標Ⅱは「地域の教育力を高めます」です。基本目標Ⅱの考え方は、保護者に学ぶ機会を提供するとともに、保護者同士のネットワークの構築や地域における居場所づくり等の施策を推進し、家庭の教育力の向上を図ります。また、地域で社会教育活動に携わる関係団体間の連携を促進するとともに、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動を一

体的に推進し、地域の教育力の向上を図ります。としております。この基本目標の達成のため、家庭の教育力の向上、学校・家庭・地域の連携強化という基本方針を定めています。

8ページをお願いします。基本目標Ⅲは「生涯を通じた学ぶ機会を提供します」です。

基本目標Ⅲの考え方は、いつでも、どこでも、だれでも学習することができ、一人ひとりが学びの成果を生かして、豊かな人生を送ることができるよう、図書館や公民館等の生涯学習拠点施設の整備を行い、学校教育と生涯学習・社会教育の連携を図るとともに、芸術・学術文化活動、文化財保護・活用等の推進に努めます。としております。この基本目標の達成のため、図書館の充実、生涯学習の推進、芸術・学術文化活動の推進など、5つの基本方針を定めています。

9ページをお願いします。10ページにかけて、施策体系を示しております。3つの基本目標の達成のために、15の基本方針に基づき、具体的な施策を実施することとしております。具体的な施策として、例えば確かな学力の育成という基本方針に基づき、①自立した学習者の育成、②指導方法の改善、③時代の進展に対応した教育の推進という主要施策を掲げています。以下、それぞれの基本方針に基づく主要施策を掲げており、総数39施策となっています。なお、さらに詳細な施策内容につきましては、17ページ以降の各論に記載がありますが、説明は省略させていただきます。

最後に、11ページをお願いします。

計画の進行管理でございます。「CHANCE（可能性） CHALLENGE（挑戦） CREATE（創造）～ふるさと下関に誇りと愛情 未来を拓く 一人ひとりの学び～」という基本理念を実現するため、本計画に定めた施策を確実に実施し、その施策を点検・評価し、必要に応じて改善を図ることが重要と考えております。施策の点検・評価については、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第26条の規定に基づき毎年行うこととし、このPDCAサイクルを重視しながら、常に基本理念に立ち返って教育行政を進めてまいりたいと考えております。下関市教育振興基本計画につきまして、説明は以上でございます。

前田晋太郎（市長）

皆さんからご意見をいただきたいと思います。はい、吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

ご説明ありがとうございます。

今までいろいろな形でこの基本方針、それから今回の大綱に関しては説明を受けたり議論したりしてきました。そういった中で、この3Cですね「CHANCE（可能性） CHALLENGE（挑戦） CREATE（創造）～ふるさと下関に誇りと愛情 未来を拓く 一人ひとりの学び～」ということで、個人的には非常にわかりやすいですし、非常に良い内容になって、子供から大人までとつきやすいのではないかなというふうに思います。

その中で、昨日の定例会でも皆さんにお願いしたのが、この教育委員会で働く皆さん、それから、市で働く方々、それから学校で働いている皆様、生徒たち、子供たち、それからその保護者たち、こういった方みんなに、「CHANCE（可能性） CHALLENGE（挑戦） CREATE（創造）」が身近にあると思います。これは、この教育大綱だけではなくていろいろな形で使えるものだと思います。教育委員会はこういった形を方針にして前に進んでいるというふうなことだけでも、自身として何かチャンスがないのか、チャレンジできないのか、どういうことがクリエイトできるのかってことを考えることが大事だと思います。これを真ん中に置いて議論していく、いろんなことに試していくということがこの下関市全体で広がっていけばいいなというふうに思いました。感想になりますけども以上です。

前田晋太郎（市長）

はい、ありがとうございます。

ほかにございますか。はい、川畑委員。

川畑誠治（教育委員）

ご説明ありがとうございました。

今、吉村委員の話を聞いていまして、身近にあるという観点から、学校現場の感想をお話させてもらえればと思います。学校現場では教職員の立場と児童生徒の立場で2種類あると思うのですが、教職員もそれぞれの学校で校種を問わずいろいろなことをやっていると思うのですが、この教育理念を掲げることによって、目の前でやっていることの価値づけができると思っています。そういった意味では、「CHANCE（可能性） CHALLENGE（挑戦） CREATE（創造）」というのはとても重要な教育理念、わかりやすい理念だなというふうに思います。一方、児童生徒の立場からすると、ややもすると、何かこう困難なことがあると逃げがちなきがあると思うのですが、そういったときに、このCHANCE（可能性）というのが、背中を押してくれるような気がします。

昨年度、中学校の私の意見発表会というのがありました。その中である生徒が発表した内容に、「ピンチはチャンス」というワードにすごく背中を押されたと言っていました。市全体でCHANCE（可能性）というのを掲げてやっていくことによって、子供たちに勇気を与えることもできるのではないかなと思います。そして、失敗もあるかもしれませんが、やり続けることによって、いろいろなクリエイトにつながっていくんだというところで、身近なことから長期的なことへのつながりも出てくるのでとても良いなというふうに感じました。

いずれにしても、学校現場の教職員や児童生徒にとっては、この教育理念はすごく頑張れるというか、勇気が湧くというかそういうふうな理念になっている気がいたします。昨年3月まで勤めていて、こういう理念がこれからあると学校現場もやりやすいな、子供たちも学校活動につながっていくなというふうに思います。

前田晋太郎（市長）

はい、ありがとうございます。  
どうぞ、佐々木委員。

佐々木猛（教育長職務代理者）

ご説明ありがとうございます。

私も、「CHANCE（可能性） CHALLENGE（挑戦） CREATE（創造）」は、とてもすばらしい言葉だなというふうに聞いていました。

まず私たち大人も仕事においても、チャンス、チャレンジ、クリエイトが必要な中で仕事をしています。改めて子供たちにCHANCE（可能性） CHALLENGE（挑戦） CREATE（創造）、これをもってやっていくということは近い将来、子供たちが社会から求められるものに対応できる能力を作っていくことにつながります。この「CHANCE（可能性） CHALLENGE（挑戦） CREATE（創造）」は自らが可能性を見いだして、自らが挑戦して行って、自らが創り出していくことです。これがこれからの社会において求められるものの大きな柱の1つというふうになっておりますので、ぜひこのところをしっかりとらえていただきながら、やっていただけたらというふうにも思いますので、ぜひこの冊子を吉村委員がおっしゃられたように、保護者も含めて多くの方々に広めていただき多くの方々が知っていただくことをよろしくお願いしたいと思います。

以上です。

前田晋太郎（市長）

ありがとうございます。  
はい、畚野委員。

畚野美香子（教育委員）

他の教育委員のお話を聞きまして、先生、保護者、それから生徒の話が出てきました。私は保護者の代表としてここにいるわけですがけれども、今回の「CHANCE（可能性） CHALLENGE（挑戦） CREATE（創造）」、こちらの理念というのが、具体的にどういうことをしていったらいいのかを考えたときに、やはり下関でも学校でも誇りとするもの、何か集中できるものがあれば、いじめ、不登校の減少にもなりますし、また、保護者・地域・学校の連携の深い信頼関係を作っていくことにつながっていくのかなと思っています。

下関のそれぞれの学校で得意とする分野を何か1つ作る。色を持つということも大事なことを考えました。例えば、今、太鼓とか踊りとかで名前が挙がる学校があります。合唱とかもそうで

す。そういった得意をそれぞれ学校で1つ何か出してもらって、英語がすごく盛んに学習ができるんだとか、数学がすごく得意とか、そういったものをこれから取り組んでいきたいんだっていうような特色を上げてもらえば、これから私立の学校に負けずに公立の学校が生き延びていき、すばらしい生徒たちを下関にそのまま残してもらって活躍してもらおうということを考えると、下関のこの学校にどれだけ魅力があるかっていうのを発信していく必要があるかと思っています。

それでこれに繋がって最終的にCHANCE（可能性）CHALLENGE（挑戦）CREATE（創造）のこの3つのCの基本理念っていうのが輝いてくると思うので、この辺のところ少し具体的に、突っ込んでもらって話を進めていくのも面白いかなと思いました。

前田晋太郎（市長）

はい、ありがとうございます。

現在の教育大綱は、「夢への挑戦 生き抜く力 胸に誇りと志」でした。当時といたしますか私が8年前に就任した時にはもうすでにあった教育大綱ですけど、こういうのってやみくもに変えていいものでもないと思っていました。当時は例えば、不登校であったり、その数年前に残念ながらみずからの命をなげうってしまった生徒に対する命の大切さをかなり重くとらえて、もう少し積極的に学校に通う、引きこもりにならないようするというので、やはり生きるということがテーマであったと思っています。それは今でも、これからはずっと変わるものではないのですけども、時代の流れの中で、今度は人が減っていくというか、若い人たちが都会に出ていく傾向が非常に強くなる時代に特になってきたっていうことで、下関に対する、故郷に対する思い、愛情とか誇りとか、育ててもらったときの感謝の気持ちとかそういったものをもう少し意識する教育になっていく必要があるのではないかという思いが私はだんだん強くなってきて、時間も経ったし、教育大綱というものをそろそろ見直す時期じゃないかなっていうがありました。

非常に良いものになったなというふうに私は思っています。なぜかという、若い人たちが、この町で育って、大人になって、自分が今から夢に向かって、それは仕事であるとか楽しい人生謳歌するために過ごしていこうと、当然人間はするわけですけど、この町にはそのためのチャンス、可能性の話になりますけど、都会に行かないとそういうものが手に入らないんじゃないかっていう考え方に常にたっしてしまっているようであれば、当然いけないと思います。そういうことはないわけです。今の時代は、地方だって十分にすばらしい人生を謳歌することができるということを、やはり幼いころから伝えていく必要がすごくあるかなというふうに思っている点で、私はすごくいいものができたと思います。言葉に英文が入って、例えば、おじいちゃんおばあちゃんとかこれ見たときに、なぜ英語を入れているんだっていうような人たちもいるかもしれないけども、それは決してハイカラな話をねらっているわけとかではなくて、今の若い人たちには、できるだけ届きやすい言葉で、私はキャッチーな言葉の方がいいと思っているし、その意味合いとしても、今の時代に私はすごく見合ったものになっていると確信をしていますので、ぜひこの方向性で、教育委員の皆さんからも今、素晴らしい後押しをいただいたと思いますので、ご理解をいただければなというふうに思っております。

この基本目標とですね、説明がありました基本方針については、総合計画との整合性が図られてものになりますので、この教育振興基本計画をもってですね、教育大綱としたいと考えておりますので、皆さんご了解をいただければと思いますよろしくお願いします。

（はい（全員））

前田晋太郎（市長）

どうもありがとうございます。

それでは今日の会議の大きなものはこれで終わりでございます。教育大綱が策定されまして、市長と教育委員会が同じ内容に向かって進めていけると思っております。市長と教育委員会が連携をしながら今後具体的な施策を実施していくようになりますが、これまでの議論の中で、「連携」というキーワードが様々出てきたように思っております。計画の中に、学校、家庭、地域の連携強化もありますし、前回の会議では吉村委員からの市立の幼稚園から大学までの連携というお話もいただいております。

残り時間は、今後の施策を実施するにあたって、連携という視点で少し意見交換ができればと思っております。いろいろ皆さん思いがありましたら、ここで話をいただければと思っております。時間は20分ほどしております。よろしく願いいたします。

はいどうぞ、吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

前回の議論の中で、先ほど市長からありました幼稚園から大学までというふうなことで考えると、下関市のように市が管理している幼稚園から大学までそろっている市町というのはなかなか珍しいと思います。そういった中で、大元の行政の省庁が分かれているのでなかなか連携というのが難しくなっているのはいるのですが、ここは市長のお力で一刀両断して、幼稚園、小学校中学校、高等学校、大学まで一気通貫して、意見交換やいろんな形で協力ができるようにしていけば、地元に着も湧くでしょうし、地域の皆さんからもそういうふうなことがわかりやすいんじゃないかなというふうに思って、前回のときに提案させていただきました。

今回、連携ということで、私もなかなかその連携というのがどういうことなのかというふうに考えました。そういった中で、子供を中心に学校、家庭、地域、これは基本目標の地域力ということかもしれませんが、この連携が必要じゃないかなというふうに思います。これはあくまでもここは持論になります。

もっと簡単に表現しますと、子供の周りには大人がいるんだと。大人がどんな仕組みで、どんな組織で子供たちのために、何ができるのかということをもう一度考えていかないとけないときかなというふうに思います。今や、ハラスメント、暴力という名のもとに、我が子へのしつけはもとより、他人の子を叱ることもできない風潮になっています。そんな中、子供を褒めて育てる、叱って育てる、本には褒めて育てようってたくさん出ています。でも、本当に褒める愛だけで子供の将来に保障ができるのかというのは、私はあまり自信がない方です。子供は悪いことをすることも他人に迷惑をかけることもたくさんあります。そんなときに、本気で本心から、叱ってくれる当たり前のように叱ってくれる大人がなかなか今は少ない気がします。やはり、家庭も学校も地域、我々も、子供たちに良いことと悪いことできちんと褒めるときには褒める、叱るときにはちゃんと叱れるような大人がたくさん増えていけばもっともっと子供たちというのは、大きく成長するのかなというふうに思います。

今、我々大人がどうすべきかというふうなことで考えると、今までは学校教育、学校へ丸投げしているケースが非常に大きいと思われまます。しつけもそうですし、学校はやはり勉強と共同生活を学ぶところで、子供のしつけとか生活習慣、これは家庭や地域で子供たちに教えるというふうに思っています。そういった学校への依存体質から脱却してPTA、学校運営協議会それからまちづくり協議会、それから先ほど申し上げた幼小中高大までつながる強みを生かして、どうやったら、本当にこの愛を持って叱ることができるのかというのを下関市として、もっと考えて発信していけばいいのではないかなというふうに思いました。

それで、先日、ある子供と話をしたときに、朝方まで友達と通信でゲームをしていて、翌日は眠たいということで、友達とLINEで「今日、どうする。休んじゃうか。」というふうなことで、かなりの長い期間に学校に行けてないという子供がございました。それで、「学校を休むから」と言われて、親も「行けないなら行かなくて良いよ」と言っているのかどうかわかりませんが、軽い感じで「わかったよ」というふうなことを言われるというふうなことで、それが3日そして1週間続くと、学校に足が遠のいてゲーム習慣が続いてしまうというふうなことで話を聞きました。その生活習慣とかもですね、子供と親だけではどうしてもできない部分もあると思いますので、そういったことも、学校を通じてできるカウンセリングなのかわかりませんが、そういう人たちを介して生活習慣を改善していくということも、この学校に通わない子供たちへの1つの手助けになるのかなというふうに思います。

それからもう1つ、やはり自殺する多くの子供たちの事です。これはタイガーフックプロジェクトの方でいろいろ調べたりして、夏休み明けた9月1日が年間通して一番多い時になるんですけど、そういう子供たちとか、自殺志願の子供たちの話を聞くと、そういったときにやはり「相談相手がいない」とか、「自分をきちんと見てくれない」「褒めてくれない、叱ってくれない」「自分をちゃんと見てくれる存在が必要なんです」というふうなことが多く、言われていました。ある子供は友達から平気で死ぬと言われたことを、言った友達は遊び半分で言っているんですけど、言われた子供たちはそれ重たく受けとめて、「私って本当に必要ないんだ」、「僕っていてもしょうがないんだ」というふうな気持ちになっていくことを相談できる相手がいまありません。私たちが幼いころは昭和の近所のおばちゃんやおじちゃんが叱ってくれたり褒めてくれたりというふうな環境が整っていました。叱ってくれた人ほど覚えているし、感謝しています。ある意味自分の人生を多少なりとも正してくれた人ではないかというふうに思っています。そうい

う意味で言うと、この下関は、市長をはじめ、教育に対して力を入れていく中、本当にいい環境にあるのですが、なかなか、ここは難しいところだと思いますけどほめ合う叱り合う風土こういったものを構築していけるようにすればいいんじゃないかなと思いました。

その中で、今回の「CHANCE（可能性） CHALLENGE（挑戦） CREATE（創造）～ふるさと下関に誇りと愛情 未来を拓く 一人ひとりの学び～」の言葉が非常に僕は心に響きました。子供たちも自分が社会の一員だということをもっともっと認識してもらって、生きることへの喜びを実感していければいいのではないかなというふうに思います。少し持論で気づきみたいな話になりましたけども、以上です。

前田晋太郎（市長）

連携から始まって、独自の教育論というか、それから学校に依存ばかりせず学校から出て、地域や家庭でやっぱり育てるところをしていけないといけない。しつけの部分はまさに、私も共感するところがあります。

うちの子も3人おりますが、全く性格が違います。ゲームで起きてこずに朝まで遊ぶことが全くなかった子もいれば、そんな感じの子もいます。うちの子の場合は起きてこなくても、私が恐ろしいので、頑張っけて目をこすりながら学校に行くんですけど、私が恐ろしくなかったら、もしくは私がいなかったらもしかしたら、いわゆるひきこもり予備軍、もしくはそうなっていたかもしれないなっていうのは今ちょっと思いながら聞かせてもらいましたけど、今、吉村委員が言われたいろんなポイントがありますけど、どうやってそのあたりのことを、指導していけばいいのか、幼稚園から大学までという話もありました。表現が難しいんですが、私は保護者が大人になりきれてないところが正直あるから、その大人を教育してあげたいという思いはずっと強いです。

畚野委員は先程、保護者の代表としてっていうふうに言われていて、それは半分はそうなんですけど、保護者はPTAという組織でそれぞれ区分がありますが、我々行政の立場の職員さんですね、あまりこの熱心な指導というのは親に対してできないじゃないですか。どっちかというとな、ここで私は政治の出番だろうと思っています。一昔前はですね、組織の体制が教育に政治を絡めるなということでした。ですので、私が市議会議員のころは、政治はあんまり教育のこと言ってははなないとか言っている市議会議員が何人かいましたけど、では誰がこの街の教育を、皆の民意を受けながら、正しい方法を主張して変えていくんだという時代でしたけど、やっとなそれはこういうふうになってきて、もう本当に私も市議会議員の皆さんも積極的に教育やそして保護者PTAの皆さんと接触をして意見することができる時代になったので、今、吉村さんの話を聞いて思うのは、例えば簡単な話、PTAの組織ですごいみんな熱心なお父さんお母さんには素直な方々がいらっしやるので、例えばそこに、優秀な講師に来ていただいたり、年に1回私とそのゆっくり話をする時間を作るとか、もう少し勇気を出して、チャンスをつくっていくといいのかなと思います。PTAと政治が積極的に交わるっていう場面はあんまりなかったかなと思うので、それは1つあるかと思っています。親に気づかせるというか、うちの子は、これができないのは学校のせいと思わせているようでは良くないと思います。それは結局、先生の負担を減らすことにも将来なるし、事務的な労力を軽減することにもなるわけですからここは大事なポイントかと思っています。

少しずれているかもしれませんが大事ポイントがたくさんあって、それが連携という言葉でくくるならそういうことなのかなと思います。

どうぞ。はい佐々木さん。

佐々木猛（教育長職務代理者）

私も市長がおっしゃることをものすごい実感しています。

本当に、今、保護者においても働き方改革だとか、ひとり親世帯だとか、いろいろな面で、自分たちの子育てにおいて希薄になっている人たちが多いというのもデータにも出ています。それにおいて、我が子に対して、どのように子育てをしていっていいのかということが、先ほど吉村委員さんおっしゃられた、近所のおじさんみたいな方もどんどん減っていき、どうやっては我が子を注意していっていいのかというのがわからないということで、家庭教育支援チームというのが、今、下関でも少しずつできつつあります。

なので、逆に、例えば中学校区を核とする家庭教育支援チームの設立を、幼小中PTA連合会

がなくなって下関市PTA連合会の連合会という形になるので、下関市PTA連合会とタッグ、もしくは婦人連合会さん、こちらはPTAで頑張ったお母さん方がご活躍いただいている方も多いところもあるので、社会教育関係団体としていらっしゃる婦人連合会の方々も中に入っていたきながら、子育てにおける家庭教育支援チームというのを設立できないだろうか、中学校区を核としてできないだろうかというところをもっとPTA連合会等婦人連合会さんとともに連携をしていきながら、設立を促すっていうのも、1つのやり方なのかなというふうに思います。

吉村委員のおっしゃられた、学校への依存度という部分でも、非常に勘違いされた保護者の方も多くて、特に小学校に上がったときに、よく学校にクレームに来ている保護者さんがいる中で、よく言葉に聞くのが「こんなのじゃ安心して我が子預けることができない」です。「おたくの子供さんは保育園児ですか。」聞きたいぐらい、「預ける」という言葉を使われることが多いんです。学校は預ける場所ではなくて学ぶ場所です。そこをしっかりと保護者に理解していただきたいと思います。

本当につらいのは、保護者の文句ばかりみたいになるので申し訳ないのですけれども、スウェット上下で参観日にきている保護者の方がいらっしゃいます。決して良い格好をしろとは言いませんが、お子様が見ている前なので、まるでパジャマのような格好で学校に来るといのはいかなものかなというふうなことでも思います。しっかりと保護者を教育するという場所を、先ほど前田市長がおっしゃられたようにいかに構築させていくか、ここを連携させていくかということが、この大綱の基本目標Ⅱの基本方針1で家庭の教育力の向上ってうたっているところの1つポイントにもなってくるかと思っておりますので、そこはぜひ私も声を大にしてPTA連合会の会長さんに訴えていきたいなというふうにも思っています。

よろしく申し上げます。

前田晋太郎（市長）

はい、磯部教育長。

磯部芳規（教育長）

教育長として1つ整理をしていただきたいと思います。私の考えていることです。

「連携」という言葉です。いろいろな連携と言葉があるのですが、今、教育委員会が考えている連携というのは、下関は市大との包括連携も結んだことで、幼稚園小さなお子様から大学まで一本の流れの中ができています。小さい子供がすてきな大人になるまでのこの一本の流れの中でいろいろなものと連携していく。だから連携という言葉があって1つひとつが孤立しているのではなくて、1つの流れに対して、今この子供に必要なのは政治だと思ったら、ぜひ市長さん言われたようなように政治的にもしっかりと参画してもらわないといけないし、産学連携であるとか、官民連携であるとか博学連携だとか、コミュニティ・スクール、PTA、こういったものと連携していかなければいけない。連携ということはいろいろありますけど、一番大事なものは何かという核を整理していただけたらと思います。小さい子供がこの下関ですてきな大人になるための、一本のこの市大と包括連携結んで1つのこれが連携なんです。大人になるための連携、その連携に必要な連携をつけていく。ゲームに負けないために何をすべきか例えば国際都市というんだったら、修学旅行も少し前まではお隣の韓国に行く就学旅行が山ほどあったのが今はなくなってますよね。それとか、市大と連携をしているということで、どんどん行ってみるのもいいし、留学もあるし、そういったいろんなゲームに負けない魅力をわくわくする魅力を、この連携を一本の柱の連携を使って作っていくということを大切にする。中学校生徒指導の問題も、PTAと連携したりする。こういうふうな流れをご理解いただけたらと思います。

前田晋太郎（市長）

さっき佐々木委員が言われた家庭教育支援チームですけど、どういう方向性でどういうボリュームでどういう人たちにというのがありますが、ぜひ前向きにやっていきたいなと思いますし、例えばこの具体的なその実施の基本方針やその事業目標の中で、先ほど言われたような、例えば、来校するときの規律といった今までうたっていないようなことをここが入れ込んでいってもいいと思います。そういうきちんとした最低限の服装というか、表現はみんなに任せますけど入れていく必要はあると思います。それを入れて反発してくるんだったら、私はもうこの4年間は、そういった正しいと思うことを正しいと主張できる行政にしたいと思っているので、恐れず、最前線に出ますから、どんどんやってもらえたらなというふうに思います。教育長、よろしくお

願います。

【その他】

前田晋太郎（市長）

時間が限られておりまして、今日は良い会議になったのではないかと思います。その他言い残しがある方は願います。畚野委員、川畑委員で感想、ご意見あればどうぞ。  
畚野委員どうぞ。

畚野美香子（教育委員）

市長も教育長もおっしゃっておいりました、市でどんどん保護者を巻き込みながらという話です。教師の立場が弱くなってきているように少し感じます。教師がもう少しのびのびできるよう、学校の中で市の許される範囲で教師の補助となるような役割を担う保護者を簡単な資格や面接で採用する方法がないかと思っています。

働きたいという保護者がたくさんいます。子供が学校に通っているのでフルタイムでは働けない。子供が帰ってくる時間には帰ってきたいけれども、少し働きたいなと思っている保護者の方々はたくさんおられて、でも休みとか、子供がいる時間というのは家にいたいけど、結局そういう職場がないから、働くところがない保護者がいらっしゃるようです。

特に小学校に子供が上がってくると、お母さんたちも外に出たいなと感じているような話を聞くので、保護者が働けるような場所というのがあれば良いと思います。学校は保護者の一番働きやすい場所だとも思います。

前田晋太郎（市長）

どういうお仕事を想定していますか。イメージがわきませんでした、例えば校務技士さんとかですか。

畚野美香子（教育委員）

例えば、学校の環境を整えてくださるようなそういう技術を持ったというか、家事とかですね。そういった範囲内で行えるような簡単な、学校の整備、例えば、ちょっとカーテンがやぶれているからみてもらえるようなものとか、教師は雑務が多いと思いますので、雑務の方を助けてくれるような形であったり、また子供たちの勉強教えるときに補助的なものはないかと思っています。

前田晋太郎（市長）

そういう仕事はないことはないですか。  
大坪部次長どうぞ。

大坪勇一（教育部次長（学校教育課長））

学校教育課です。一般的には校務支援員という形で、国の方から、支援があるんですけど、例えば印刷業務を行ったり、子供たちの校外学習お手伝いであるとか、それぞれの自治体によって活動の仕方が違うんですけど、教員でなければできないもの以外をお手伝いいただく。先ほどの雑務というところで学校の組織に貢献していただくものがあります。

前田晋太郎（市長）

今日は自由意見だからそれは1つ参考してもらっていいと思います。  
ありがとうございます。  
他にありますか。はい、川畑委員。

川畑誠治（教育委員）

連携ということで、どんな連携をしてきたかと振り返っていました。国際課と学校が1つの学校が連携して、市の姉妹都市の展示を校内で行いました。効果があったと思うのは、本当は子供たちという思いがあったのですが、効果があったと感じたのは保護者会とかで、たくさんの保護者が来校するときに見ているんです。それがパネルになっている展示物だけじゃなくて、市

長応接室に本来ならないといけない重要なものとかも、期間を決めて貸していただいて、そういった貴重なものも展示させてもらったりして、学校の関係者ではあるけども、市民でもあって、そういったところで下関を知る1つの機会になる、そんな連携の仕方はあるのかなというふうに思っています。可能ならば市長部局と連携をして、しっかり下関のアピールを学校という場を使ってやっていくことも可能なのかなというふうに思いました。

さっき教育長もおっしゃいましたけどもやはり学校が一番大事にしているのは、子供たちの場づくりと、子供たちのきずなづくりを大事にしています。そのためには教師だけではなくて、保護者も地域の方も、それからいろいろな関係機関もそうですし、さっきおっしゃっていた、縦の教育機関の繋がりもそうです。そういったところで、子供たちが輝いていく場面が増えていくんじゃないかというふうに思いました。

幼稚園と中学校がちょっとした行事のときに交流をする機会がありました。具体的に申し上げますと、川中中学校のときに、体育祭の総練習を木曜日にやりました。隣が川中幼稚園ですので、園長先生と話をして園児を見学にこさせる。近くであればそういう、離れた校種でも連携してやっていくこともできます。園児もいい表情をしていましたが、その時に中学生が今まで見たことがないような表情をしました。

今までの狭い視野で考えると、中は小との連携とか、中は高との連携ってというような視点にとらわれがちだったところを、今回こうやって広げてもらったことで、いろんな可能性が出てくるのではないかと思います。そういったところでこの連携というキーワードは、学校現場でも大切にしていきながら、今までの考えをさらに広げていくこともできる気がしました。

前田晋太郎（市長）

ありがとうございます。

今日はずいぶん教育大綱を決定しました。これは大きな話であり、ここから先何年にもわたってこの教育大綱を元に子供たちをしっかりと学ばせていくということになります。今日は大事な1日でありました。ご協力いただいて皆さんありがとうございます。

総合教育会議は、冒頭にも言いましたけどもこの位置付け本当に大きなものがあります。川畑委員が新しく小田先生から変わられて教育委員になっていただきまして、大事な大きな方向性を決めるのは必ずこのメンバーでやっていきます。教育委員の皆さんには引き続き日ごろの生活の中で、子供の事ばかり頭に置くことはできませんが、できる限り子供たちのことに意識を向けていただいて、お時間をいただいて恐縮ですが、行事にもご積極的に参加をお願いします。

良いアイデアとか思いがあったら、やっぱり常にストックをしておかないといけません。記憶だけでは絶対限界があって、人間って入れ込むインプットはみんな能力高ければどれでもできるんですけど、アウトプットっていうのは本当になかなか難しい作業で、私は常にこの携帯にメモをして、出せるときに出来るようにしておりますけれども、そういったいろんなことにチャレンジしながら、ここって短い時間ときに出していく作業を意識を持ってやっていけたらなというふうに思っております。

皆さん盛り上がるような良いご意見をいただきました。時間をかければもっといい会議にもなるんでしょうけれども、今日はこのあたりで終了とします。

今日の意見を事務局の皆さんはしっかりと聞いていただいて、今後の参考であったり、少しトライしようとなりかけた部分を拾っていただき、次回以降の参考にしていただければなというふうに思います。

今日はここまでです。お疲れ様でございました。

（全員（ありがとうございました。））

#### 【閉会の宣告】

門田重雄（教育部長）

それでは以上をもちまして、令和7年度第1回総合教育会議を終了いたします。大変お疲れ様でした。